

の吹いた年は、早く雨日数の増加する傾向があった。

(7)19世紀と現在について、半旬別天気率の年間推移の比較を行い以下のような結果を得た。すなわち、第一に5月は19世紀に比べ現在は高晴天率

期がはっきり表われていること。第二に、梅雨季は19世紀の方が現在より早めだったこと。第三に、秋霖季は19世紀、現在で時期に差がないこと。第四に、現在の半旬別天気率の年間推移は、1880年代と最もよく似ていること。以上の四点である。

## 奈良市における住宅地化と都市計画

西村 みどり

### 1 研究の目的・方法

奈良市は、国際的な文化観光都市であり、同時に大阪大都市圏における住機能を分担している住宅都市でもある。そのため、この両側面の調和をはかることが、本市行政の基本課題となっている。

本論文では、奈良市における住宅衛星都市的機能とその発展過程を明らかにするとともに、都市計画の現状と問題点を考察する。

研究は、統計・文献調査および聞きとり調査によって、進める。

### 2 要旨

奈良市は、大阪から30km圏内に位置し、大阪大都市圏の拡大に伴い、大阪の郊外住宅地としての機能が增大している。昭和40年代前半から急速な人口増加が始まり、毎年1万人前後の増加を続けた。こうした人口増加は、昭和50年代に入ってやや鈍化しているものの、平城ニュータウンなどの大規模開発の進行により、今後もなお当分の間、持続すると考えられる。

住宅地化は、昭和25年の学園前住宅地の開発にはじまり、近鉄奈良線沿いに生駒市との市境から西大寺、平城宮跡西端に至るまで完全に連担しつつ南北方向に拡大し、西奈良地域は、めざましい発展をとげた。現在では、近鉄橿原線に沿って、大和郡山市との市境まで、住宅地化が南下している。

大阪の郊外住宅地としての機能が高まるにつ

れ、母市との関係もより密接なものとなった。大阪への指向率・依存率の高さは、商圏・人口流動などによくあらわれている。

こうした住宅地化の進展によって、自然環境や歴史的景観との調和という点において、多くの問題が生じている。その現状に対処するため、市では、昭和56年に、国際文化観光都市としてふさわしいまちづくりを日指した都市計画をスタートさせ、65年を目標年度とし、保全地域と開発地域を区分した計画的な土地利用に努めている。保全地域として、風致地区、歴史的風土特別保存地区等をもうけ、保全体制の充実を計っている。しかし住宅地開発に対して厳しい規制がなされている、これらの地区の存在は、一方で、奈良市における住宅地の空間的拡大を制限する原因にもなっており、奈良市の抱える都市問題は、複雑な性格を帯びている。

現地点では、歴史的風土・環境と新しい住宅地開発の進行との間で生じた土地利用の混乱は緩和されつつあり、都市計画は、一様の成果をあげていると言える。しかし、両者の調和と統一が実現するためには、まだ多くの課題があり、また、偏った住宅地化により、都市基盤・公共施設の整備という点において、地域差が生じている。今後、市では、21世紀を展望した長期的な観点から、都市計画を進めていく必要がある。